

教育事例

「介護過程」教授法についての一考察 — 学生がとらえる介護過程の意義 —

伊藤希久美 (佐久大学信州短期大学部)

For teaching methods of care process
— The significance of the care process that students grasp —

Kikumi Ito
(Department of Shinshu Junior College at Saku University)

Abstract: According to the law revision in 2009, prescribed clinical training hours have been increased significantly. One of the backgrounds includes the increasing demand for "the care depending on the mental and physical situation" for care workers. Nevertheless, it seems to be difficult for students to understand mental and physical situation of aged person appropriately. Moreover it is difficult to share the essence of evaluate the care process and the clarify significance of clinical training effectively. In order to establish better teaching methods, questionnaire survey was performed at the end of class and obtained suggestion about the teaching methods for the care process.

Keywords: care workers, care work education, care process

I . はじめに

2009年のカリキュラム改正において、介護過程は150時間とそれまでの授業時間数よりはるかに多い時間数の教育が義務付けられた。その背景の一つとして、2007年の「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正がある。石野氏が「業務規定が『入浴・排泄・食事・その他の介護』から『心身の状況に応じた介護』に変更されたことに関連している。つまり、(中略)心身の状況に応じた介護を行うためには、アセスメントという判断作業が不可欠であることから、介護福祉士の業務において介護過程を展開する事が必須の要件になったのである。」⁽¹⁾と述べているように、心身の状況を的確に判断するための情報を収集し、アセスメントをする中でニーズや課題を抽出し、個別の介護計画を立案し実施評価をする、この一連の循環を理解する事が学生には求められる。しかし、学生自身とはまったく違う時代・生活背景・人生を歩んできた大先輩の「心身の状況」を的確に把握すること自体、学生にとっては容易なことではない。合わせて、介護福祉を学ぶ学生一人ひとりも、生活背景が異なり知識や経験も全く違うため、定められているカリキュラムはあるものの、実際の教授法については確立したものが出

来ず、毎年苦慮しているのが現状である。

その中で、今年度2年次生において前期に行った授業アンケートにおいて、「記録を書くだけの授業にこれだけ多くの時間数が必要なのか」と記述した学生がいた。施設介護実習で使用する介護過程に必要な記録用紙を使いながら、その書き方についても理解を求めたが、書き方よりも生活支援の考え方を理解する事が本質であり、授業の目的は「専門職として、科学的・専門的で根拠のある生活支援技術を提供するための基となる介護過程を習得する」。介護過程の意義として、「A：予測性をもった根拠が明確な介護をするため B：利用者の自己決定を支援するため C：多職種連携のため D：後輩の教育と家族への介護指導のため E：介護を学問として構築するため F：介護福祉士の自己成長のため」⁽²⁾が挙げられており、それぞれの理解が求められる。しかし、前期の授業アンケート結果から、「介護過程に関する記録が書ける事が、介護過程を理解した」と捉える学生がいるのではないかと感じた。

そこで、学生が「介護過程の展開」をどう捉えているのを明らかにすることで、今後の教授方法を確立していく上での示唆が得られるのではないかと考え、同2年次生後期授業終了時アンケート調査を行った。その結果に

ついて、考察する。

II. 研究方法

1. 対象：2014 年度 2 年次生 44 名
2. アンケート実施時期：2 年次後期授業最終日に実施。
3. 方法：質問紙法を用い、授業時間内に配布回収。
4. 倫理的配慮：アンケート実施にあたっては、授業方法を検討していく上でのデータとしてのみ使用し、成績等には一切関係がない事、アンケートは無記名とし個人が特定されることはない事を、口頭とアンケート用紙への記載にて伝達。研究のデータとしての利用に同意が得られない場合は、その旨を記載する項目を設けた。
5. 調査内容：質問①介護過程の授業を通して「介護福祉士が介護過程の展開を行う必要性について理解が出来たか」→「理解できた・まあまあ理解できた・あまり理解できなかった・理解できなかった」4 段階で評価し、その理由について自由記述。
質問②介護福祉士はなぜ、介護過程を行う必要があると考えるか 自由記述・複数回答可
6. 分析方法：アンケート記載内容を、KJ 法を参考に分類し、分析検討を行った。

III. 結果

アンケート回収 43 人のうち、今回の調査に同意が得られたのは 40 人 (93%) であった。質問①理解できた 23 人 (57.5%) まあまあ理解できた 16 人 (40%) あまり理解できなかった 0 人 (0%) 理解できなかった 1 人 (2.5%) であり、理解できたとまあまあ理解できが 97.5% を占めた。

質問①の「理解できた」理由として、23 の自由記述を得た。内容を KJ 法で分類した結果、授業を通して理解できた (6) 実習を通して理解できた (2) アセスメントの大切さが理解できた (1) 利用者にあった介護計画立案の大切さが理解できた (2) 利用者理解の為だと理解できた (1) コミュニケーション手段として理解できた (1) より良い介護・生活に繋がることが理解できた (4) 真のニーズを理解出来る (3) 就職後に役立つ (1) その他 (2) であった。「まあまあ理解できた」理由としては、授業を通して理解できた (5) 授業内容への理解不十分 (1) 実習を通して理解できた (2) アセスメントの大切さが理解できた (1) より良い介護・生活

に繋がることが理解できた (2) 真のニーズを理解出来る (2) QOL 向上のため (1) であった。「理解できなかった」理由としては、「自分の人生だから好きに生きたらいいと思う。介護者の自己満足だと思う。」という回答を得た。詳しい内容は表 1 にまとめた。

質問②については、今回のアンケートは、学生の意見をそのまま聞きたかった事もあり、自由記述が主なアンケート内容であったため、質問の趣旨とは異なるように捉えられる表現もあったが、学生自身の声として表 2 にまとめた。

IV. 考察

今回のアンケート調査は、学生の意見を聞きたかったこともあり自由記述を主としたが、その結果、1 つの自由記述からいくつもの考え方・見方が出来るような結果となってしまったため、明確な数値や、回答の関連性を分析するには至らなかったが、学生の思いをくみ取りながら、今後の教授法として以下の考察を得た。

1 つ目に、大多数の学生は介護過程の展開の必要性について「理解が出来た」「まあまあ理解できた」と回答しているが、1 名については「理解が出来なかった」と回答している。その理由として、「その人の人生であり、好きに生きたらよい。介護者の自己満足だと思う」と回答している。この回答から、日本介護福祉士会が定める倫理綱領、倫理基準 (行動規範) の理解や、介護福祉士とは何かについての理解が十分得られていないまま、授業を進めてしまったことが考えられる。人生そのものは利用者自身のものであり、介護者の立場で無理に変えることは出来ないが、専門的な立場から利用者の生活を把握した時に、その人らしい生活の継続の為に、必要な支援については利用者の理解できる言葉で説明し同意を得た上で、介護者が実施していくことが求められており、それが職業倫理である。状況によっては、専門的な立場が必要であると判断した支援内容を、利用者に説明をしても同意が得られない場合もある。同意が得られないまま無理に支援を続行することは、倫理綱領に反する。また、同意が得られなかったから支援を中止する事も同じである。なぜ、同意が得られなかったのか、どうしたら同意が得られるのか、について再度情報を整理していく中で、その人らしい生活の実現に向け努力する事が必要になる。利用者が言うがままに支援するのであれば、そこに専門性は存在しなくても良いことになる。黒田氏が「看護過程に入る前には、看護について、さらにはもっ

と奥深い看護の対象である人間とは何かについて、人間の健康や安寧について、人間と人間の関係について、そして、ケアあるいは援助とは何かについて、など、きわめて基本的な概念が学生のなかで確固たる信念として根づいている必要がある⁽³⁾と述べているように、学生が、「介護とは何か」「人間とは何か」、介護福祉士の役割に対しどのようにとらえ、どのような介護福祉士像を描いているのかを早い段階で把握したうえで、国家資格である「介護福祉士」の倫理綱領や、倫理基準、人間としての尊厳の保持、専門職業についての理解が深められるような時間が必要であると考え。この内容は、今までは欠けていた部分であり、科目間連携も含め、今後の課題が明確になった。

2つ目に、学内で使用している介護過程の展開に関係する記録用紙の書き方の理解を目指す事ももちろん必要だが、記録用紙はそれぞれの養成校、施設介護実習先、就職した先の施設ごとに異なる。しかし、その考え方は同じであると言える。「人間を知る」「心身の状況を知る」ための観察の視野を広げたり、介入が必要であると判断した生活支援内容がなぜ必要であるのかその根拠を明確にし、科学的に考えることの重要性や文献の活用方法、介入の方法は1つではなく様々であることが理解でき、実践できるような教授が必要であると考え。

現在、これらを学ぶ方法としては、施設介護実習前はペーパーペイシエントが主であり、実習後は実習の際の事例を活用しながら振り返りを行っている。しかし、実習前に行うペーパーペイシエントの場合、そこに実際の利用者は存在しないためイメージしづらいことや、日々の変化や時間的経過を追うことが出来ず、また、利用者理解の深め方や他職種連携による意見交換が出来ないなど限界がある。「事例学習は学習展開や学生の反応を予測し、それに対応する方法まで準備をしておく必要がある⁽⁴⁾」と述べられているように、より実際に近い形のロールプレイや施設介護実習で実際に関わった事例等を更に活用した事例展開をしていくことで、施設介護実習や現場に出た時に学内での学びが活かせ、介護過程の展開の意義が実際の体験として理解できるのではないかと考える。

また、施設介護実習に出て実際の利用者に関わり介護過程の展開を行っていく際、ペーパーペイシエントのイメージのままだと学生によっては思うように進まず、時間に追われながら進んでいる現状がある。授業を進めていくにあたり、多くの事例に触れることも大切だとは思いますが、1つの事例にじっくり時間をかけ、理解を深めて

いくことも一つの方法ではないかと考える。

今回のアンケート結果から、学生の中には、授業での学びを施設介護実習の場で活かし、利用者に成果や変化が見られることを実感することで、介護過程の意義の理解を深めていることが分かった。座学と実学の結びつきである。学内で基本を学び、理解したうえで、実際に施設介護実習の場で目の前の利用者に寄り添い、理解、考えを深め、その利用者の状況に合わせた柔軟な考え方や感性が身につくような教授が必要であると考え。

質問2の回答からは、「介護過程の意義」として挙げられる項目が入ってきてはいるが、「より良い生活とは何か」「利用者を理解するとはどういうことなのか」「真のニーズとは何か」まで掘り下げた質問になっていないため、学生がその意義をどこまで理解しているのか、今回のアンケート結果からは読み取ることができなかった。アンケートの取り方に工夫が必要であり今後の課題である。

黒田氏は（看護過程を）「教える側が『ナースは何をする人』という問いかけの答え、すなわち看護のフィロソフィーをしっかりと持っているからこそ、『なぜ看護過程なのか』を学生に明確に伝えることができるのだと思う。看護過程が何のために必要なのかを、単に定義上からではなく、看護がめざすゴールとの関係から説くことが、学生にとって看護過程を学ぶ土台となり、ひいてはこの科目への学生の動機づけも高まるはずである⁽⁵⁾」と述べているように、学生が「なぜ介護過程の展開を行うことが必要なのか」が理解できるよう、これまでの経験や事例を通して具体的に伝えながら、介護のやりがい楽しさにつながることも伝えていきたいと考える。

V. まとめ

1. 介護福祉士の倫理綱領・倫理基準（行動規範）について改めて説明をし、専門職としての介護福祉士の理解を深める時間を持つ必要がある（科目間連携も含め）
2. 介護過程の展開の必要性について、これまでの経験や事例検討を通して具体的に伝えていく
3. 介護過程の展開に必要な記録用紙の記述方法の理解と同時に、介護過程の意義について学生が実感できる授業展開を検討していく
4. 事例検討の方法の検討
5. 施設介護実習での学び・経験を活かせるような授業展開方法を検討していく

6. 介護過程の展開を行うことで介護の楽しさ、やりがいにも繋がることを伝えていく

Ⅵ. 終わりに

「介護の目標は、利用者が望むその人らしい生活を実現すること」⁽⁶⁾であり、介護福祉士は「介護福祉の対象者は、病気や障害などのために日常生活の自立に困難をきたしている利用者である。つまり、利用者とは憲法第 25 条に規定されている国民の権利である「健康で文化的な生活」を送ることが困難な人たちである。そこで介護は、それらの人たちが健康で文化的な生活が送れるように、また、人間としての尊厳を守るために可能な限りの自立を支援し、その人らしいより良い人生が送れること（自己実現）を最終的な目的にしている。」⁽⁷⁾と述べられている。介護過程に必要な記録が書けることももちろん必要なことではあるが、「介護過程の意義」がしっかりと理解できるような授業を展開していく必要がある。

【引用文献】

- (1) 石野育子：最新介護福祉全書 7 介護「介護過程」, メヂカルフレンド社, 2013 年, p i (まえがき)
- (2) 石野育子：最新介護福祉全書 7 介護「介護過程」, メヂカルフレンド社, 2013 年, p15～18
- (3) 黒田裕子：看護過程の教え方, 医学書院, 2008 年, p11
- (4) 播本雅津子：「教材として用いる演習事例に関する研究」, 大阪健康福祉短期大学紀要, 2005 年, p63
- (5) 黒田裕子：看護過程の教え方, 医学書院, 2008 年, p27
- (6) 石野育子：最新介護福祉全書 7 介護「介護過程」, メヂカルフレンド社, 2013 年, p3
- (7) 石野育子：最新介護福祉全書 7 介護「介護過程」, メヂカルフレンド社, 2013 年, p20

表 1:質問 1 の自由記述内容

分類した項目	「理解が出来た」理由	「まあまあ理解が出来た」理由	「理解できなかった」理由
授業を通して理解できた	<ul style="list-style-type: none"> ・計画の立案から実施までを行い、振り返ることで、どういった事が良かったか足りなかったのかなどを考え次に活かして繋がると思ったから ・日常的に行っている事を文章化したものであるとらえているため ・分からない所は何度でも先生が教えてくれたし、自分が質問しなくても先生から細目に声を掛けてくれたから聞きやすかった ・教科書だけでなく、実際に演習を通して学ぶことが出来たから ・教え方が分かりやすかった ・教科書を読むよりも、実際に事例を使い介護計画を立案する事が多く良かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で事例研究やパワーポイントを作成する事によって理解が深まった ・難しいところもあったが良かった ・何回も授業で学んだし、テストに何回も出たのでその結果理解は深まった ・授業で何度もやったから 授業の中で学び、感じた 	
実習を通して理解できた	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に実習を通してその必要性を学べた ・実際に利用者に関わる中で、何が必要か見極めそれに応じた計画を実施することで効果が得られたから 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習で役に立ったから ・実習で実際に介護計画を立案する中で理解できた 	
アセスメントの大切さが理解できた	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者さんの真のニーズに気づき、支援していくためには、多角的に情報を集め、分析する事が必要であると思うから 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活を支援するために利用者の情報を知ること、利用者・介護者に目標があることは大切だと思う 	
計画立案の大切さが理解できた	<ul style="list-style-type: none"> ・その方にあった計画を立てることの大切さを学べた ・利用者の自立を目指して計画を立てていくことを学ぶことができたため 		
利用者理解のため	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の事を知るには、とても大切だと思う 		
コミュニケーション手段として理解	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションを図るため 		
より良い介護・生活に繋がることが理解できた	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者がさらに生き生きと生活出来る支援に繋がるから ・在宅復帰をする場合、施設生活が長くなる場合、自分でできることの維持、向上をしていく必要があるから ・利用者を様々な視点から観察でき、その方がその人らしい生活を送るために必要なことだと思った ・利用者を理解し、より良いケアにつなげることが大切だと分かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援を行うのに必要だと思う ・どうすることがその人に一番良いのかを考えることが大切だから 	
真のニーズを理解できる	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者さんが施設生活を送る中で真のニーズをくみ取る必要性。 ・その時々々の状況や状態など、また、情報を収集するそれらによって、利用者の思い、ニーズを知ることが出来ることが分かった ・利用者の課題がはっきりと明確になるから 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の置かれている立場や課題が理解できるため ・利用者の真のニーズを見つけ、取り組むツールであり、考え方の大切さを理解した 	
就職後に役立つ	<ul style="list-style-type: none"> ・働きだして支援していく中で、この展開が理解できないと無理だと思う 		
授業内容への理解不十分		<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントでの発表をする必要性が分からなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の人生だから好きに生きたいと思う。介護者の自己満足だと思う。
QOLを高めるためと理解できた		<ul style="list-style-type: none"> ・一番利用者に身近な存在なので、その方のQOLを高めるために向き合うことは当たり前だと思うから 	
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・出来たから ・なんとなく 		

表 2:質問 2 の自由記述内容(理解できなかったと回答した学生の自由記述はなかった)

	「理解できた」と回答した学生の意見	「まあまあ理解できた」と回答した学生の意見
より良い生活・介護・支援の為	利用者のより良い生活のため (6)	利用者のより良い生活のため
	より良い支援、介助につなげるため (4)	より良い支援、介助を行うため (2)
	利用者に適した支援を行うため (2)	利用者に合ったケアを考えられる (3)
	利用者の自立を支援するため (2)	利用者本位のケア (2)
	生活の質の向上	QOLの向上
	利用者のニーズに合った介護を行うため	課題やニーズが変わった時にすぐに対応できる
利用者理解の為	利用者のことをよく知るため (4)	利用者をより深く知ることができる (5)
	利用者を理解するため (6)	利用者を理解するため (5)
	個人の特性を生かす	利用者の変化に気づくため 本当に必要なことは何か知れる
	利用者と分かりあうため	ただ介護するだけならロボットがしても変わらない。利用者を理解し、必要なことは何かを考えながら介護するため
他職種・他者との連携の為	他者との情報共有のため	色んな職員と意見交換しやすい
	職員と連携して同じ考えを共有するため	家族との連携をとるため
自己研鑽の為	自分たちの勉強のため	介護福祉士として成長するため
	介護者の考えを整理するため	利用者の目線に立てる
	科学的な根拠を求め自己研鑽につなげるため	
その人らしさ・QOLの向上の為	その人らしく生きてもらうため	利用者のQOLを高めるため
	QOL向上	自己実現
	利用者の望む生活を実現するため	
生きる楽しみ・意欲・やりたいことを見つける為	施設生活での楽しみを見つけるため	生きがい、楽しみを見つける
	意欲向上により生きる楽しみにつながる	ADLの向上
	本当にやりたいことを見つけるため	
	意欲向上や筋力維持になる 趣味・特技・好きなことなどを活かし生活意欲を高めるため	
真のニーズを把握する為	利用者に幸せな思いを持ってもらう	利用者の望みを反映させるため
	利用者の真のニーズに気づくため	利用者のニーズを引き出す
介護の専門性	介護の専門性	専門的な視点で利用者を見る必要がある
情報収集	情報収集	単なる介助や支援ではなく、資格を有することは責任を持つことであると思う
コミュニケーション	コミュニケーション	
事故対策	ヒヤリハット対策	事故やトラブルの早期発見ができる
客観性の検討	介護の客観性を検討するため	何を行うにしてもその根拠が大切であり、考え方が重要であると思う
利用者本位の計画	利用者本位の計画を立案するため	
ケアの継続性	継続的なケアを提供するため	次につなげていくため